名古屋大学東洋史研究報告　三二号　二〇〇八年三月発行

研究ノート

# 清末民国期東三省における冀東商人

山本　進

## はじめに

概ね一九世紀前半期（嘉慶・道光年間）頃より、奉天では大豆生産が急成長した。一八世紀までの奉天は、内地から漢族移民が流入して開墾を推進し、粟やコウリャンなどの雑穀を直隷や山東に移出し、奉天では自給できない棉布や雑貨を移入していた。しかし大豆（豆貨三品と呼ばれる大豆・豆油・豆餅）の移出が急伸したことにより、奉天経済は雑穀生産地であった時代とは大きく変化した。その特徴は以下の三点に要約される。第一に、大豆の移出先と棉布・雑貨の移入元が江南方面、更には海外となったことで、江南を中心とする全国市場や海外市場との結び付きが強まった。華北沿岸部との雑穀―棉布交易は依然として継続されたが、その割合は対江南交易と較べて相対的に低下した。第二に、大豆移出が活況を呈し、奉天一省だけでは供給不足を来たしたため、奥地である吉林省や黒龍江省の開墾にも拍車がかかった。奥地での大豆生産を輸送面から支援したのが東清鉄道（日露戦争後、哈爾濱―大連線の長春以南が南満洲鉄道となる）の敷設であったことは言うまでもない。第三に、東三省は人口が希薄で、もちろん機械化もなされていなかったため、域外より多くの農業労働者を導入しなければならなかった。本稿で検討するのは、第三点に関連する、東三省における出稼ぎ者の動態である。

従来の東三省移民史研究によると、移民や出稼ぎ者の出身地の大宗は山東省、特に山東半島沿岸地域であった。この地

域には可耕地が少なく、絶えず相対的過剰人口に圧迫されてきたこと、また地理的に遼東半島と近接していることから、清朝の移民制限政策にもかかわらず、海路による出稼ぎ者が多かったことが知られている。彼らは農繁期に農業労働者として雇用され、大豆の収穫後山東に帰省していた。[1] 大豆移出の活況により清末の東三省は全体的に出超傾向にあったが、中国本土に対しては入超傾向にあり、更に大豆が稼ぎ出した資金の相当部分は出稼ぎ者によって山東方面に還流していた。官銀号が東三省に投下した大小洋銭（銀貨）の内、大洋銭は山東からの出稼ぎ労働者によって持ち出されたと言われている。[2]

今日の東三省経済を築いたのが主として山東方面からの農業移民および農業出稼ぎ者であったことは改めて言うまでもないであろう。しかし他地域からの商業移民や商業出稼ぎ者の存在も忘れてはいけない。彼らは地域の小売買から糧桟・油房・焼鍋の経営、更には票荘などの金融業者として、東三省の流通経済に不可欠の存在であった。だが、従来の東北地域研究は商人に対してあまり関心を払ってこなかった。

東三省における商人研究に先鞭を付けた楊合義によると、東北で活動する商人は地理的に近い直隷・山東・山西三省の出身者が多かったが、数は少ないものの資金力で卓越していたのは山西商人であった。[3] また、佐伯富も清代の塞外や東北で山西商人が活躍していたことを検証している。[4] 彼らは生産・流通部門でも並々ならぬ力量を発揮したが、特に金融部門では独占的地位を構築した。一九世紀後半以降の東三省では、上海を中心とする全国市場、営口のような開港場、鉄嶺のような大豆集散地の相互で、通用する通貨がそれぞれ異なっており、近代的銀行業が未発達の段階では両替・為替業者が必要不可欠であった。そしてそれを担い得る者は、当時にあっては華北を主要拠点としつつ全国に支店網を構築していた山西票号を置いて他にいなかった。[5]

ただ、山西商人は海上交易には疎かった。既述の如く、東三省の主要産品は大豆と雑穀であり、大連の登場以前は営口が最大の移出港であったが、一九〇五年における営口の公議会役員一五名の中で、山西商人は僅か一名（油房経営者）に過ぎなかった。[6] また一九一〇年代のある報告も、東三省では一般に山東と広東の商人が有力で、直隷と山西の商人がこれに次ぐと述べている。[7] これらの事実を総合すると、東三省の穀物交易において、山西商人は金融部門に特化しており、加工や輸送の諸部門は直隷・山東・広東など沿海諸省の商人で

あったと思われる。[8]

山西商人が東北で卓越した地位を築いていたことは間違いではないだろう。しかし金融や遠隔地交易を行うのは資本力に勝った少数の者に限られる。東北開発の進展に伴って来訪した農業移民や農業出稼ぎ者に対し、棉布をはじめとする日用雑貨を供給していたであろう小商人の姿は、先行研究からは見出せない。本稿の課題は、大商人と労働者の中間に位置する小商人層の実態を解明することである。

清末から民国にかけての東北で小売業に従事していたのは、山東人と直隷人であった。直隷では特に北東部の冀東地方と呼ばれる地域から、多数の商人と商業的出稼ぎ者（以下、併せて冀東商人と総称する）を輩出していた。冀東地方は山海関に隣接しているため、山東省登州府と並んで東三省へ最も進出しやすく、清代中期より関東へ商業活動に赴くものが多かった。しかし結論を先取りすると、同じ出稼ぎ者でも山東人と直隷人との間には相違点も多い。第一に、山東人の出身地が半島部を中心としながらも広範囲に及んでいるのに対し、直隷人の出身地は冀東地方に集中する傾向がより強い。また、冀東地方内部でも出稼ぎ者の多い地区と少ない地区が存在する。総じて、東三省の直隷商人・商業出稼ぎ者には出身地の偏倚性が強いのである。第二に、山東出身者の大部分が農業出稼ぎで、商人の割合が低いのに対し、冀東出身者の少なからぬ者が商業活動に従事していることである。絶対数では山東商人の方が冀東商人よりも多いのであるが、商業部門への志向は冀東人ほど顕著に見られないのである。もちろん、移民・出稼ぎ者全体から見れば商業部門従事者の割合は低いのであるが、冀東人の商業への志向性は他の直隷人や山東人より相対的に高い。それでは、冀東人は何故商業部門へより積極的に進出し得たのだろうか。また、直隷出身者の中で何故冀東人に商業従事者が集中するのであろうか。本稿では二〇世紀の各種調査報告資料と清末民国期の地方志を手掛かりとして、東三省における冀東商人について考察する。

## 一　清末民国期の冀東商人

周知のように、東三省は満洲族の故地であったが、開発の担い手となったのは山東や直隷からの漢族移民や出稼ぎ者であった。ただ清末民国期の東北は政情が不安定であり、清朝も張作霖政権も移民や出稼ぎ者の調査を行っていない。この時期に人口移動を含む実態調査を積極的に行ったのは、東三

省や華北の経済支配を企図する日本、就中その尖兵である南満洲鉄道であった。そこでまず、二〇世紀初頭から一九三〇年代にかけての商人の動向を日本側調査資料から観察しよう。

清末の東三省において最も盛んに活動していた中国系商人は、やはり山西商人であった。特に金融部門では、山西票号は清朝財政との緊密な繋がりを武器として独占的地位を築き上げていた。彼らの得意先は大豆移出や雑貨移入を担う交易商であったが、日本が「北満」と呼んでいた吉林省（長春や吉林など南西部を除く）および黒龍江省では、交易商に交じって冀東商人による為替取組が見られた。『北満洲経済調査資料』（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課、一九一〇―一一年）は「北満」における票荘について、

匯荘ハ一ニ票荘ト称ス。南満地方ニ於ケル票荘ハ、多クハ其資本豊富ニシテ、為替両替ノ外、広ク多額ノ貸付ニ従事シ、又銭舗ノ後援者トシテ有力ナル地位ヲ占ムルモ、北満ニ在リテハ、殆ト為替ノミヲ取扱ヒ、多クハ山西地方ニ本店ヲ有スルモノノ出張員カ商家ニ寄寓シテ之ヲ取扱フモノニシテ、別ニ門戸ヲ張ルモノナシ。但シ豊富ナル資本ヲ有スルコトハ、南満地方ニ異ラスシテ、多額ノ為替ヲ托スルモ何等ノ不安ナキモ、営口ノ如キ対外市場トハ土地余リニ遠隔ニシテ、直接取引関係ヲ有スルモノ少ナク、雙城堡、阿什河、呼蘭等ノ大市場ヲ除ケハ、殆ト匯荘ニ托シテ為替ヲ取組ム程度ノ必要ヲ見サルヲ以テ、多クハ兌換券若クハ現銀ノ儘、随時携行スルヲ常トシ、偶直隷省ノ商人カ該省楽亭方面ニ為替ヲ取組ムモノアルニ過キスシテ、其営業状態甚タ閑散ナリ（一七二頁）。

と概観する。日露戦争直後の吉黒両省は奉天省と較べて為替需要が少なく、山西票号も商店に出張員を置く程度であったことが読み取れるが、僅かな得意先の中では直隷商人による永平府楽亭県への為替取組が大きな地位を占めていたことが目を引く。

総論に続いて各地の金融事情が詳細に述べられているが、票荘の存在が確認できるのは阿什河・北団林子・呼蘭・雙城堡の四箇所に過ぎない。この内、阿什河については、

為替業務ヲ取扱フモノ、和順号、功成玉ノ二家アリ。為替取組先ハ多ク哈爾賓、営口及直隷省楽亭ノ三箇所ナレトモ、大抵哈爾賓営口ニ現送シ、匯荘ノ手ヲ経ルモノ少ナク、殊ニ哈爾賓向為替ハ最モ僅少ニシテ、就中較ヤ多キヲ楽亭トス。蓋シ楽亭向為替ノ多キハ、此地商家ノ多

数カ関裡幇ニ係ルカ故ナリ（一八五頁）。

とあり、北団林子については、

為替ハ官銀分号ニテ取扱フ外、二三外来商家ノ寄寓シテ匯荘ノ業務ヲ取扱フモノアリ。仕向地ハ多クハ呼蘭、哈爾賓、営口、長春、関裡、等ナレトモ、商家ノ随時帯送スルモノ多ク、偶々関裡、営口等ノ遠地ニ取組ヲ見ルノ外、概シテ其額少シ（二九〇頁）。

とあり、雙城堡については、

為替ハ匯荘トシテ、阿什河ヨリ和順昌、吉林ヨリ功成玉ノ各出張所アレトモ、若干関裡、楽亭向為替ノ取組マルル外、其他ノ各地ヘ取替［組］マルルモノ極メテ稀ナリ（三一一頁）。

とある。ハルビン・営口・長春など大豆集散地との取組だけでなく、関裡・楽亭との取組も少なくなかったことが明白に記されている。関裡とは山海関以西の中国本土の意であるが、阿什河の項で楽亭商人が関裡幇を結成していたと述べられていることから、ここでは楽亭を含む冀東地方を指していると考えられる。楽亭県出身者を中心とする冀東商人は吉黒方面で商業活動に従事し、少なからぬ資金を故郷に為替送金していたことが、この資料から読み取れる。

同時期の別の調査でも、冀東商人の活動が確認される。『吉林東南部経済調査資料』（南満洲鉄道株式会社調査課、一九一一年）によると、延吉府局子街では、主な商店一六戸の内、山西資本が四戸、直隷資本が三戸、直隷資本と他省資本との合股が二戸（山東と吉林）、山東資本が一戸であった（一五―一六頁）。頭道溝では、山東資本が優勢であったが（二三頁）、琿春では山東資本が八戸、関裡資本が六戸、山西資本が四戸、営口・奉天・回回が各一戸であり（六〇頁）、直隷商人とりわけ冀東商人は山西商人や山東商人と互角の勢力を有していた。

一方「南満」と呼ばれた奉天省でも、山東商人と並んで直隷商人が進出していた。『南満洲経済調査資料』（南満洲鉄道株式会社調査課、一九〇九―一〇年）は日露戦争後の「南満」の状況を詳細に観察した調査報告書であるが、同書に

満洲東南部地方ノ住民ハ概ネ山東省ノ移住民ニシテ、移住以来遠キハ三世・四世ニ及ヒ、普通二世ノモノ最モ多シ。彼等ハ殆ト凡テ農業ニ従事シ、商人ハ懐仁・寛甸・鳳凰城・岫巖等ニ若干アルヲ除ケハ、多クハ直隷省人ナリトス（第二、総論、一四頁）。

とあるように、移住者の絶対数では山東出身者が卓越するも

のの、移民総数に占める商人の割合では直隷出身者が勝っていた。もちろん、主要都市では山東商人の総数は直隷商人を凌駕していた。奉天の省都瀋陽では、

奉天ニ於ケル商店ノ種類ハ、凡テ七十六行アリ。商人ノ原籍ヲ重ナル商店ニ就キテ分別スルトキハ、票行・銭行ハ山西人多ク、桟行・粮行ハ山東人及本地人、山貨店ハ山東人、焼鍋行ハ本地人、雑貨店ハ山東人及関裡人、殊ニ雑貨店中糸房（主トシテ布疋類ヲ販売スルモノ）ハ山東人多シ。要スルニ山東人ハ奉天商人ノ最モ大部分ヲ占ムト知ルヘシ（第四、奉天、七一頁）。

とあり、また開港場営口でも、

牛荘ノ繁栄カ流下シテ田庄台ニ移リ、更ニ営口ノ地ニ遷移スルヤ、機ヲ見ルニ敏ナル山東商賈ハ率先シテ此地ニ来リ、商業ヲ経営シ、油房ヲ開設セリ。今日ニ於テモ、営口商人ノ大部分ヲ占ムル者ハ、実ニ山東商人ナリトス（第六、営口、七三頁）。

とあるように、数の上では山東商人の方が勝っていたようである。

奉天省における直隷商人の特徴は、吉黒両省と同様、冀東出身者の割合が高いことであった。瀋陽の場合、奉天商業会議所の調査による清国大商店二〇店の中で支配人または資本主の原籍が直隷であるのは六戸あるが、この内益和店（桟房）と広成店（店行）は永平府人の出資・経営に係わり、萃豊店（店行）は出資者が奉天人で経営者が永平府人であった（第四、奉天、七二―七三頁）。営口の場合、出身地が判別できる直隷系商店は楽亭県人劉履貞の厚発合、北京の永成銀号が営む盛記、天津人義昌元の謙昌号、天津人鄭均の永遠興（何れも雑貨布行）だけであるのに対し、山東人の商店は二〇戸以上存在する（第六、営口、七五―七七頁）。ただ、華北や東北から営口に来る客商の数を見ると、

新民府：四三　瀋陽：四二　吉林：三五
寛城子：三〇　遼陽：二六　関裡：一九
牛荘：一八　蓋平：一七　雙城堡：一七
鉄嶺：一七

であり、地元商人が圧倒的優勢である中で、冀東商人の健闘が目立つ。因みに、山東商人は一三名、天津商人は五名、北京商人は二名に止まる（第六、営口、八三頁）。

この傾向は別の資料でも再確認できる。外務省編『南満洲ニ於ケル商業』（金港堂書籍、一九〇七年）によると、鉄嶺では、資本主の原籍地が直隷である商店七戸の内、臨榆一戸、灤

州一戸、昌黎二戸、天津一戸、不明二戸であった（三六九―三七二頁）。七戸の中の四戸が冀東資本だったのである。また通江口では、有力商店二〇戸の内「山西人ノ開キタルモノハ計十一戸ニシテ、即チ全数ノ半以上ヲ占」めており、直隷資本は華発合・仁発合・徳興広の僅か三店であったが、彼らは皆楽亭県出身者であったと言う（四七三―四七四頁）。この他、奉天省中部での調査報告書『本渓湖城廠間経済調査資料』（南満洲鉄道株式会社総務部事務局調査課、一九一五年）によると、同地では「中流以上商舗ノ資本主ハ地方ノ者僅々四割ヲ占ムルニ過キス、残部ノ六割ハ直隷永平、山東蓬莱、興京、奉天、山西等ノ者ナリ」（五八頁）とある。本渓湖一帯でもやはり冀東商人や登州商人の活躍が目立っている。

清朝の崩壊と近代的銀行の簇生により、山西商人は東三省における影響力を次第に失っていくが、冀東商人や山東商人の地位は不動であった。たとえば一九一〇年代中頃、長春の満鉄付属地における銭舗の総数は二一一戸であったが、出資者の出身地は楽亭九戸、臨榆五戸、撫寧三戸、哈爾賓・四川・賓州（吉林）・安徽が各一戸であり、二一一戸の中の一七戸が冀東資本であった。[9] また谷村武編『奉天に於ける商工業の現勢』（南満洲鉄道株式会社興業部商工課、一九二七年）二六〇―二七〇頁には、奉天（瀋陽）における主要店舗の店名、職種、財東（資本主）の氏名、財東の出生地、執事人（支配人）の氏名、執事人の出生地などを列挙した一覧表が収録されているが、同表によると、執事人の出身地は、直隷省旧永平府が四五人（内訳は昌黎一六人、撫寧一〇人、臨榆八人、山海関二人、楽亭六人、灤県二人、盧龍一人）、直隷省旧永平府以外が九人（天津四人、豊潤・寧河・保定・東鹿・深州各一人）、山東省旧登州府・莱州府が三六人（黄県三一人、招遠二人、掖県二人、煙台一人）、その他の山東省が二人、奉天省が一四人、山西省が九人、河南省武安県が二人である。これらの数値から、商店の経営者は直隷人と山東人が拮抗していること、前者は冀東商人が、後者は黄県商人が卓越していることが読み取れる。一方、財東は一店舗につき一出資者とは限らないので、単純な数量比較が困難であるが、概ね直隷省・山東省・奉天省出身者が多く、山西省出身者は彼らの半分程度である。また直隷省と山東省では冀東人と黄県人が他府県出身者を圧倒している。このように、一九二〇年代中頃の奉天でも、冀東商人の活躍は瞠目すべきものであった。山東商人の数も冀東商人に次いで多く、また黄県という特定地域への出身地偏倚現象も見られるが、[10] ある調査によると、こ

の時期の両省から東三省への出稼ぎ者は山東が約三七万二千人（この内、半島部分が二〇万人前後）、直隷が約二万六千人であったとあり[11]、出稼ぎ者総数に占める商人の割合は直隷人の方が高かった。

執事人の業種別内訳を見ると、直隷商人は雑貨行で圧倒的優勢を誇り、銭舗や匯兌荘など金融部門でも相当の浸透を果たしている。山西商人は財東・執事人とも金融業が約半数を占めているが、他業種へはほとんど進出していない。山東商人は糸房経営に偏倚しており[12]、糸房（他業種との兼営を含む）三六戸の内、二八人（黄県二五人）を占める。

ただ、一口に商人と言っても、大店舗では資本主、支配人、被用者が分化していた。冀東商人や山東商人の中には出資者や支配人も数多くいたが、より特徴的なのは被用者すなわち出稼ぎ型の商人が多いことである。まず山東商人から見ると、『満洲日日新聞』明治四三年（一九一〇）一〇月八日「出稼山東人」に次のような記述がある。

出稼人の種類は商業、農業、労役の三種に過ぎず、其他職工、奴僕等ありと雖も極めて少数なり。尚別に娼婦、馬賊等あるべきも是れは論外とす。商業出稼人は目的地に於ける山東出身若しくは山東に縁由ある商店に番頭たる者或は各地を行商する者とす。別に長期の出稼とも謂ふ可き店主なる者あり。（中略）山東出稼人特有の長所は各出稼の系統を有するに在り。彼の満洲に於いて最とも多数なる山東商人の如き、自家の資本を以つて営業するもの甚だ稀に、多くは山東内地の資本を利用せり。故に強大なる根拠を満洲に構ふるが如きも、其実単純なる営業主にして、資本主は山東内地奥深き辺に在りて満洲の営業より生ずる相応なる利分を収めつゝあり。資本主が足郷関を出でず、遙かに満洲の営業振りを明かにし以て放資の緩急を籌るを得るもの、営業主も店員も共に資本主と系統を同ふする出稼人にして、其時々の帰省に依り営業状態を報告せしむるの便あるを以てなり。各店員等は薄給に安んじ、歳月の推移と共に所在商業の経験を積み、手腕ある者は軈て郷里の資本を利用して新に営業主となり、否らざれば高級番頭となる。又満洲内地の山東行商は到る処連絡あり。その一種の機関に依り郷里に為替送金の道を開ける等頗る称するに足る。

すなわち、総数の多い山東商人も、その大部分は山東資本に雇われた店員や行商人であり、彼らは商業出稼ぎ者として山東—東北間を定期的に往復していた。山東在住の資本主も地

縁的繋がりのある同郷人を積極的に雇用し、彼らが帰省した時に経営状況の報告を受けていた。黄県など特定地方の出身者が卓越する一因には、このような地縁的紐帯があるものと思われる。

同じ現象は冀東商人においても看取される。既に見たとおり、冀東商人の中では楽亭県出身者の活躍が際立っていたが、この傾向は一九三〇年代の農村調査でも再確認される。まず『冀東地区十六箇県県勢概況調査報告書』（冀東地区農村実態調査班、一九三六年）楽亭県を見ると、

> 県内商戸は主に県内にて消費する粮穀、雑貨の取引をなせる者にして、直接満洲に於て糧桟、油房、製粉業等を営み居たる重要な者も多し。此等は満洲移民を招致し大いに満洲の現金を楽亭県に吸収し居たりたるなり（二八七頁）。

とあり、また

> 本県は昔より満洲に多くの移民を出し居れり。其の歴史は清朝の満洲入国解禁以前より盛に出したるものと思はる。現在は昭和七、八年頃より次第に減少しつゝあり。本県人中には満洲にて百数万元より数千元の中、小資本にて粮桟、油房、製粉業、皮革商等を営み、其の進出地域は奉天最も多く新京、ハルビンにまで及ぶ。労働者は最も多く、前記同郷の商家を追いて行く者、他に就職して働く者等、商業労働を主として営む。海岸住民にては営口方面に船乗として出稼をなすものあり。県城益発銀行につきて調査せるに、満洲国建国以前は楽亭への満洲よりの送金は年約九〇〇万元にして、現在は約四〇〇万元となりたりと云へり。但し別に財政調査の際には満洲建国前後に於て変化なしと答へ居れり。現在四〇〇万元程度なる事は確実なるべし（二九三頁）。

とあるように、同県は東三省への商業出稼ぎ者を多数輩出し、彼らの多くは楽亭資本の糧桟・油房・製粉業者に雇用され、毎年約九〇〇万元を故郷に送金していた。しかし「満洲国」の出稼ぎ制限政策により、三〇年代半ばには約四〇〇万元に落ち込んでいる。[13]

次に『冀東地区内二十五箇村農村実態調査報告』下巻（冀東地区農村実態調査班、一九三六年）楽亭県柏庄によると、

> 県内調査部落は何れも出稼は多く五、六年以前に於ては満洲に出たる者多かりき。昭和六年（民国二十年）頃迄は柏庄にては一〇〇名は下らず、主に奉天、ハルビン等に行きたるも、現在は年々二〇名程の帰郷者あり（柏庄

は昨年の帰郷者二〇人、渡満者五、六人。本年は三人入満せり）。現在は在満者二、三〇名に過ぎず。大苗庄にては六〇戸中以前は満洲に出稼人を出せるもの約五〇戸はありたり。海倫、奉天、昔の長春、ハルビン等に於て雑貨店、油房、粮桟等に働き居たり。……馬頭営に於ては五、六年前に於ては部落戸数の七、八〇パーセントは満洲出稼者を出し居たるも現在は四、五〇パーセントとなりたり。……満洲への出稼ある事により此等の部落は生活を充たし居たるなり（二四四―二四五頁）。

とあり、楽亭県の中でも柏庄は、満洲事変前は一〇〇名以上の東三省商業出稼ぎ者を送り出し、また馬頭営では、総戸数の七―八割は東三省出稼ぎ者を輩出していたことが知られる。これらの集落は東三省への出稼ぎ、特に商業出稼ぎにより生計を立てていたのである。それ故、満洲事変は彼らの生活手段を大幅に制約した。『第一回冀東地区内選択農村実態調査概要報告書』（冀東地区農村実態調査班、一九三六年）によると、

楽亭県部落に於ける移民の満洲入国制限より来る一般的疲弊が、乞食の増加として報告されたる外、二、三県に於て一部落数名の在満移民送金にるよ［よる］生計戸の記録があつた（五一―五二頁）。

とあり、出稼ぎ制限政策により楽亭県の地域経済は深刻な打撃を受けている。

楽亭県では東三省への商業出稼ぎのことを「跑関東」と呼んでいた。劉東流「楽亭県東桑園農村調査」（『益世報』一九三六年九月二六日）によると、

在此我們要注意的這富庶的基礎。不是建築在農業経営上。而是在東北商業的繁栄上。……因本村各家的壮年。甚至年不及冠或年満五十歳以上的。多「跑関東」経商（大多数是商業労働者与商業経営者。很少是経営自己的商業）。……因此本村離村人数很多。幾乎佔到全村人口六分之一。這個離村率不能不算大了。……一般愚民尚以商人為尊。仍然作着富商大賈的迷夢。……本村土地集中的原因。最主要的是富商収買。「跑関東」的商人。一旦発了財。雖然土地利潤小。但土地財産総比較穏定。況且在農村講闊気。非土地多不可。所以本村的四大地主。多由商業起家。就是土地較多些的。亦莫不是走了這一条路。[14]

とあり、楽亭県東桑園では「跑関東」に赴く者が人口比で六分の一に及んでおり、彼らの大多数は商業資本家（出資者）ではなく、商店の経営者や商業労働者であった。満洲事変後

も多くの農民が「跑関東」により富商大賈となる夢を追っていたが、彼らの最終目標は楽亭県で地主になることであった。

それでは、何故黄県や楽亭県など特定地方の出身者が商業出稼ぎを好んで行ったのであろうか。黄県商人について言えば、民国期の黄県は土布の集散地であった。『支那省別全誌』第四巻、山東省によると、

本省は到る所に土布を製織し一に荘布と号す。特に濰県、黄県を以て市場の中心とす。而して毎年遼東地方に移出するもの又は天津、北京に至るものも少なからずと云ふ（八五二頁）。

とあり、山東棉布は黄県を経由して奉天方面に移出されていた。清末民国期の東三省は大豆を移出して棉布などの雑貨を移入していたが、黄県はその中継地となり、土布交易に携わる県民も自然と増えたのであろう。一九二〇年代、奉天（瀋陽）における黄県商人の大部分が糸房すなわち棉糸商を営んでいたことも、彼らと棉業との繋がりを裏付ける。

清代中期に直隷南部・山東北西部で急成長した棉業は、その販売市場を東三省に求めたが、土布の移出経路は登州府から遼東半島を目指す道と、天津から山海関を経由して奉天に入る道があったと考えられる。黄県商人が前者の経路を商業活動の拠り所としていたとすれば、冀東商人は後者の経路を拠り所としていたのかもしれない。冀東地方でもとりわけ臨榆・撫寧・昌黎・楽亭など渤海に近い県から多くの商人が出ていることも、この仮説を裏付けている。もちろん、冀東商人や山東商人の大部分は、棉布交易などにより資産を築き、東北に定着した商人たちに雇用された商業出稼ぎ者であったことは、改めて言うまでもない。

以上のように、二〇世紀の調査資料によると、東三省で商業活動に従事していた直隷省出身者の大多数は冀東人であった。冀東商人の出身地は旧永平府の渤海沿岸部に偏倚しており、特に活動が顕著な楽亭県人について見ても、「跑関東」に赴く者を多数輩出している地区は限定されていた。このような地域的偏倚性は、棉布交易の有無や同郷人同士の繋がり（コネクション）に因るものと考えられる。それでは、彼らはいつ頃から、どのような動機で関東へ出稼ぎに出向いたのであろうか。次節では清末民国期の地方志と二〇世紀の農村調査を用いて、彼らの進出形態を考察しよう。

## 二　冀東商人の進出形態

永平府は直隷省の東端に位置し、直隷―奉天間の海上交通の中間地点として機能していた。一八世紀まで奉天の主要産品は粟やコウリャンなどの雑糧であったが、直隷向けの雑糧は牛荘や錦州で船積みされ、渤海沿岸を西進して大沽に至り、海河を遡上して天津に運ばれていた。直隷から奉天へは土布や雑貨が移出されていた。同治『遷安県志』巻八、輿地三、風俗に、

経商の貿易するは、恒に関外へ往来し、肆を列べて賈と称する者も、亦惟だ布粟を以て重しと為す。

とあり、同治『昌黎県志』巻一〇、志余、風俗、商に、

粟米の若きは則ち関東・口外より糴し、紬緞は則ち蘇杭・京師自り来る。

とあるように、永平府では奉天や熱河より粟米を移入し、棉布や綢緞を天津方面より移入していた。

直隷―奉天間の交易が活発化するのに伴い、永平府は単なる中継交易の拠点に止まらず、関東との直接取引の対象地域に成長していった。取引品目は天津と同様、雑糧と土布であった。光緒『灤州志』巻八、封域中、風俗には、

咸豊の年自り後、大荘河の民船出海し、自ら関東の糧を運び、沿海一帯に接済すれば、糧価稍平す。灤人の賈を習うもの、本地に在る者は十の二三、関東に赴く者は十の六七なり。瀋陽・吉林・黒龍江三省の地、皆至れり焉。遠賈すると雖も必ず帰り、外に流寓せる者鮮なし。毎歳資を獲、以て家口を贍す。是れ賈を以て農の不足を補える也。

とあり、灤州では咸豊年間（一八五一―一八六一）より関東の穀物を移入して沿海部で販売する民船が簇生し、商人の三分の二は東三省に赴くと言われていたが、彼らは交易を専業とする生粋の商人ではなく、農業収入の不足を補うための商業出稼ぎ者であり、遠方に赴いた者も送金のため毎年帰省していた。

永平府から奉天への移出品は土布であった。嘉慶『灤州志』巻一、疆理、風俗、商には、

易うる所は魚塩の属に過ぎず。尤も綿布多し。然るに居人の用うる者は十の二三、他郷に運ぶ者は十の七八なり。灤の土産、此れ其の尤も著しき者歟。

とあり、嘉慶年間（一七九六―一八二〇）には灤州産土布の

大部分は移出に回されていた。また乾隆『楽亭県志』巻五、風土、風俗、農の項には、

又邑中麦田甚だ少なし。粱［粱］穀・棉花最為り。

とあり、更に商の項には、

易うる所は布粟魚塩の属に過ぎず、他に異物無し。而して布粟の市う者尤も衆し。粟は則ち関外自り来たり、以て邑人の用を資く。布は則ち楽が聚藪為り。本地の需むる所一二、而して他郷に運出する者八九なり。農隙の時、女は家にて紡ぎ、男は穴にて織るを以て、遂に本業と為せり。故に布を以て粟に易うるは、実に窮民の糊口の一助なりと云う。

とあるように、楽亭では早くも乾隆年間（一七三六―一七九五）より、土布を移出して粟米を移入する分業関係を奉天との間に構築していたようである。清末には、楽亭は熱河・営口・煙台三方面に対する流通の結節点に成長した。[15]

とは言え、華北棉業の中心は直隷南部・山東北西部であり、清末には棉産地が直隷中部へ拡大していくものの、冀東は未だ飛び地のような存在に過ぎなかった。しかし、たとえ生産量は相対的に少なくとも、土布移出を契機として冀東商人が奉天へ布粟交易に出向くようになったことは重要である。おそらく、彼らを呼び水として清末以降大量の東三省向け商業出稼ぎ者が輩出したのであろう。

残念ながら、一九世紀までの布粟交易と二〇世紀の商業出稼ぎを直接結びつける史料はない。ただ、地方志の人物の項には、僅かながら関東へ赴いた人々の伝記が収録されている。もちろん、地方志の「孝友」などに採録されている者は、何らかの顕彰すべき行為を行った者だけであり、これを以て出稼ぎ者の全体像を推し量るのは限界がある。また、編纂者によって採録の基準も異なるであろう。しかし他地域の地方志と比較することで、大凡の傾向性はつかめるものと思われる。

まず府志を見よう。光緒『永平府志』巻六一、列伝一三・一四、行誼一・三には、①臨榆県人劉永春は学問の家に生まれたが、家計が困窮したため、父の代から商人となり、奉天で族祖の墓石を発見した、②灤州人陸廷陞も家が没落したため学問を諦め、瀋陽へ商売に赴き、数年後大商人となった、③撫寧県人単徳林は同治四年に馬賊が蜂起するまで、毎歳遼東にて商業に携わっていた、④臨榆県人楊彩もまた読書人から商人に転じ、吉林へ商売に出向き、穀物の売買に従事した、⑤撫寧県人薛信は、父純が道光二五年に関外の岔路河へ交易に出掛けたまま音信不通となったため捜索に赴き、江

東で父を発見したなど、五つの事例が記されている。①と②は読書人から純粋の商人になった事例であるが、③は商業出稼ぎ者である。④の楊彩と⑤の薛純はどちらとも取れるが、両人とも商業活動は不本意であった。そして州県志に最も頻繁に登場するのが、⑤のような、父親が関東へ出稼ぎに出たまま音信不通となり、孝行息子が当人や遺骸を探しに出向く話である。

永平府属の州県志で出稼ぎの事例が最も豊富に見いだせるのは、山海関が存在する東端の臨榆県である。光緒『臨榆県志』巻八、輿地三、風俗、商に「邑人の出外貿易するが若きは、率ね東三省に在るもの多し」と記されているように、臨榆商人の主たる活動地域は東三省であった。そして同書、巻二〇、事実三、郷型中、行誼には①譚玉洁、②李溱泰、③李文玉、④劉永春、⑤馬倫、⑥劉永楨、⑦解維純、⑧袁亮、⑨王清相、⑩董占一の一〇事例が確認され、また民国『臨榆県志』巻二〇、事実三、郷型中、行誼により⑪田潤、⑫楊徳蘭、⑬孫徳懋、⑭靳向華の四事例を補うと、両地方志で総計一四件の事例が見いだせる。[16] ⑪田潤が山東へ出向き、④劉永春の父と⑤馬倫の父の出稼ぎ先が不明であるのを除き、残る一一件は全て「跑関東」とその末裔である。大部分が奉天や牛荘・鉄嶺・錦州など商業の盛んな都市へ出向いており、主として商業・交易活動に従事している。中には⑬孫徳懋のように、錦州で大きな銭舗を所有する事例も見られる。その一方で、史料の性質上、①譚玉洁、②李溱泰、③李文玉、⑩董占一のように、消息の途絶えた父や叔父を奥地で発見する事例も少なくない。「跑関東」は致富の機会をもたらしたが、夢破れた者は吉林省の辺境へ流れ、乞食同然の暮らしをしていたらしい。出稼ぎ開始時期は特定できないが、⑥や⑩から道光年間（一八二一―一八五〇）には既に交易や商業出稼ぎが行われていたことがわかる。

臨榆県に次いで出稼ぎ事例が多数見いだされるのが昌黎県である。民国『昌黎県志』巻八、人物下、行誼には①楊爾瑛、②曹紹遠、③楊成年、④董藎の四事例が見いだせる。[17] ④の父が奉天で客死したのを除き、他は皆吉林省へ流浪している。①は省都吉林県であるが、③の江辺新城とは松花江上流の伯都訥、②の魚皮国は松花江中流の伯力（現在のハバロフスク）付近である。道光『続修長垣県志』巻下、人物、孝友にも

陳天和。生まれて三歳、父遠出す。……四十二歳に至り、忽ち父の信を得。魚皮国外に在り。遂に産を売りて資斧と為し、三姓・高麗を越え、約ね万里を行く。年余父と

同に家に至る。

とあり、直隷省南部から魚皮国に流れ着いた人物もいたらしい。なお、年代が判るのは②の道光年間のみである。

民国期に大量の商業出稼ぎ者を輩出した楽亭県では、光緒『楽亭県志』巻九、人物上、郷型に、①劉景陽と②孟良貴の二事例しか見いだせない。[18]①は商業従事者と断定できないが、②は熱河や瀋陽に活動範囲を拡げた商人の一族である。活動時期は劉景陽も孟良貴も道光年間の頃である。

冀東地域では如上の他、遵化直隷州豊潤県でも、光緒『豊潤県志』巻七、孝友に

徐献文。黄各荘の人なり。幼くして恃みを失う。父敏樹遼東に負販し、久しく帰らず。

王福林。桑坨荘の人なり。生まれて数月、父関を出でて生理し、二十年家書無し。

の二事例が見られる。前者は商業出稼ぎであるが、後者の生業は不明である。

冀東地域以外でも関東へ出向いた者について記す地方志は散見されるので、[19]これらの事例だけから冀東商人の東三省における優位性を論証することはできないが、この地域を中心に道光年間頃から出稼ぎが増えたとは言えるだろう。因みに山東省では、やはり半島部の登州府や莱州府を中心に、関東への出稼ぎ者について記す地方志が多いが、商業活動への従事を示す事例は少ない。また山西省では、地方志の中に出稼ぎ者の記事がほとんど見いだせない。

ここでわれわれを驚かせるのは、何らかの理由で実家と音信不通になった父親を成長した息子が探しに行くという事実である。このような行為は交通・通信手段が貧弱な当時にあっては極めて困難なことであり、それ故幸運にも成功した者が地方志に記され、顕彰されているのであるが、彼らは運を天に任せて東三省を当てもなく探し回ったわけではない。たとえば魚皮国から父を連れ帰った長垣県人陳天和は郷里で父の消息を聞いており（父の手紙を受け取ったとも解釈できる）、昌黎県人曹紹遠も斉斉哈爾[20]で父の所在を知った。また臨榆県の事例⑩で取り上げた董占一も、阿什河（阿勒楚喀）にて父が三姓で漁業をしていることを突き止めた。おそらく同郷人の間で仲間の所在に関する情報網が構築されており、とりあえず東三省の主要都市に行って同県出身者に消息を聞いて回れば何らかの手掛かりが得られるだろうという目算の下、息子たちは山海関を出て捜索の旅に赴いたのであろう。もちろん、たとえば河間府交河県富荘駅の人韓三多のように、長兄

が嘉慶末年に出奔したまま消息不明となり、数年後たまたま関東から来た客商から「関外の濫泥窪にこの鎮の出身者で韓某という者がいる」と聞かされるなど、[21]偶然のきっかけで身内の消息を知るという場合もあった。

出稼ぎ者が増大するに連れて同郷者相互の連繋も強まり、二〇世紀初頭には関裡幇のような同郷組合が組織されたのであろう。残念ながら、冀東商人の幇形成過程について記す資料は見いだせない。その中で、日中戦争中の一九四二年に日本が昌黎県侯家営で行った農村調査（『中国農村慣行調査』第五巻、岩波書店、一九五七年）には、冀東人の出稼ぎ動機・手段や相互扶助に関する貴重な聞き取りが収録されている。

まず、出稼ぎの動機について。同書一五一頁によると、「この村で財主といわれている家はどの家か」という質問に対し、村民は裕福な順番に九人の名前を挙げているが、二番の侯慶昌、三番の侯宝廉、四番の侯元文、六番の侯元宏、七番の侯元来は満洲で儲けたとあり、八番の侯允中も父が満洲で儲けたとある。彼らは皆稼いだ金を故郷に持ち帰り、土地を集積している。出稼ぎ前の階層は中流・貧戸・小売商とまちまちで、三番の侯宝廉は父の代は乞食であった。出稼ぎ者の地主化志向は先に見た劉東流の調査とも符合する。彼ら冀東人は布粟交易を契機として商業出稼ぎを開始したが、東三省に土着化して商人となる者は少なく、大部分は故郷に戻り地主となることを夢見ていた。

次に、勤め先の確保について。そもそも彼らが東三省において、致富の近道である商業に就けるのは、同郷人の身元保証があったからである。同書五頁に

満洲に行つて主に何をしているのか＝小さい商売をしている

苦力になるのは多いか＝いない。一人もいない

去年何人位満洲に行つたか＝去年は二人だけ

以前に比し最近は満洲に行く人は多くなつたか少くなつたか＝少くなつた

いつ頃から少くなつたか＝六、七年前から

どうして少くなつたか＝紹介人が少くなかなか商店に入れないから

とあり、更に六九頁に

こちらの人が初めて満洲へ行く時はどのようにして行くか＝各家皆売買人がある。この村は昔から満洲へ行つているから、それが介紹してつれてゆく

満洲にこちらの同郷会はあるか＝本県のはない

今侯家営から満洲へ行つている人は何人くらいあるか＝大体一、二百人か

主にどういう仕事をしているか＝雑貨屋の店員が多い

そういう雑貨舗の主人はやはりこちらから行つた人か＝然り

とあるように、侯家営では大抵一家から最低一人は商業従事者を輩出しており、彼らが同郷の知人を東三省の商店に紹介していた。紹介人なしでは店員になることは困難であった。同書前文五頁で侯家営の概況について総括した小沼正も、「満洲に赴くのは、苦力などになるのではなく、小さい商売をするためで、そのためには紹介人が必要であり、その紹介で先ず商店に見習として入らなければならない。商売に成功して多額の金を蓄えて帰村したり、あるいは土着して送金してくる者も少なくはなく、本村における土地獲得の原因の一として満洲出稼が挙げられている」と述べている。楽亭県で柏村・馬頭営・東桑園のような特定の村落に商業出稼ぎ者が集中するのも、同じ理由からであろう。

同郷人間の相互扶助については、同書二五二―二五三頁、侯家営に近い泥井鎮の斉鎮長からの聞き取りの中に、次のような対話がある。やや長いが、引用しよう。

鎮長さんはいつ満洲へ行かれたか＝去年九月。初は光緒年間に行つて錦州府で売買をしていた。民国十五年回来了。……

初に錦州では何の商売をしていたか＝糧業。光緒廿七年初から自分が主人でやつたのか＝ちがう。櫃上の下の方の掌櫃的

そういうところへ行くのは誰かの介紹で行くのか＝錦州の宝興当の掌櫃が泥井の人で介紹してくれた

こちらから満洲へ行くのは皆こちらから行つた人の介紹で行くのか＝然り。介紹なしでは行けぬ

泥井の地方からは、満洲のどの地方へ行つているのが多いか＝新京・寛城子・奉天・吉林・錦州。その中でも奉天が多い。黒龍江にも哈爾賓にもいる。雀のいる所には老攤児がいる（雀はどこへ行つてもいると同じように老攤児もどこにもいる）

老攤児とは何か＝老実な人

今老攤児幇とはいわなかつたか＝幇子は一行の意。組

泥井から満洲へ行つているのは何人あるか＝二百余人

その人々は泥井の幇子か＝然り

幇子というのは老家が同じならよいのか、知り合つてい

る人々か＝知らなくてもよい。同郷なら即ち幇子（老攤児幇である）
昌黎から行つている人は、満洲では互に知らなくても助け合いますか＝然り。一様。例えば金がなくなつたら、昌黎の人のところへ頼みに行く。帰つてから払うとか払わぬということは差支えない
では奉天とか錦州には同郷会はないか＝なし。しかし、上［山］東会館とか福建会館・寧波会館とかはある。しかし老攤児は会館はない（金が要る）
昌黎の人だけを老攤児というのか＝昌黎・楽亭・灤州の三県の人をいう（上はまちがい。字は老畜、正しいのは老坦。臨楡県のは狗肉幇という。老娘們たちが狗を買つて来て、それを売つた金は老娘們のものになる、だからそういう）
ではこの三県の満洲へ行つている人々は互に連絡があるか＝ない。一県内だけはある
県の人だけはどうして連絡をとるか＝別に大して連絡はない。互に介紹した関係で知つているものが知り合つてるだけ。従つて郷の同じものは知り合つているが、知らぬものは外県と同じである
昌黎幇の人は主にどういう商売をしているか＝新京では雑貨舗が多い。奉天でも同じ（臨楡・撫寧は銭行・估衣の営業が多い）。昌黎のものは又糧業も多い
楽亭幇は如何＝昌黎と大体同じ
灤州は＝右と同じ。老畜は大体同じである
そういう働きに行く人は金を儲けて帰つて来るのが多いか、留つて死ぬまでやつているのが多いか＝後者もあるが少い。前者が多い
帰つて来て商売するのは＝なし。関外で商売するのはある

既に二〇世紀初頭から商業出稼ぎには同郷人の紹介が不可欠であったことが、斉鎮長の発言で確認される。彼によると、昌黎・楽亭・灤州の三州県出身者は老攤児幇を組織していたようであるが、老攤児は正しくは老畜または老坦と書き、臨楡県人は別に狗肉幇を組織していたようである。とは言え、老攤児（老畜）幇の結合は緩く、同県人以外とは連絡がないと答えているところから、実際には昌黎幇・楽亭幇・灤州幇・臨楡幇などが分立していたのであろう。彼らは雇用労働者であり、福建商人や寧波商人のような独立自営の商人ではないので、会館を設立したり、積極的に情報交換したりする

ことはなかったが、困窮した場合には顔見知りでなくても助け合ったようである。昌黎人は雑貨店や糧業が多く、臨榆人や撫寧人は銭荘や古着屋が多いなど、出身県により商売の業種に偏りがあるのは、雇用主が同郷人を選好する傾向が強いからであろう。

しかし同郷人同士の繋がりを重んじることは、裏返せば、同郷人のいない地域や業種には積極的に進出しないという硬直性にも通じる。侯家営における別の聞き取り（同書一四四頁）では

満洲出稼人の出稼経緯如何＝食えぬので行つた者三、四戸、出身者が呼んだ者三、四戸。苦力の募集に応じた者全然なし（現在満洲で苦力をしているのは子供の時代から満洲に行つていた者）

とあり、苦力（労務者）として出稼ぎする者はいなかった。もとより苦力は商店員より実入りの少ない仕事であるが、調査時点では「満洲国」は中国内地からの商人や出稼ぎ人に厳しい為替管理を行っており、商業出稼ぎが困難になると彼らの多くは活動を休止した。楽亭県での調査（『中国農村慣行調査』第六巻、岩波書店、一九五八年）によると

此の県は元来相当富裕なところで、満洲などへ行って商売している商人が多く、最近は送金の出来ぬ関係から一家あげて移住したのもある（一三頁）

借先＝今はないが以前のことでは、満洲より帰った商人などから借りた、……

城内の商人＝から借りることは今はない、民国二十七年以後は殆どない、この地方は商人が多く、其の資本主は満洲に居り、為替管理の関係で送金が出来ず、店は資金に困り、金を貸す余裕がなくなった、……（一六頁）

などとあり、冀東商人は東三省への依存度が高かったため、「満洲国」政府の締め出し政策の影響を最も強く受けたのである。

## おわりに

清末民国期、東三省ではごく少数の大商人層と圧倒的大多数の農業移民・農業出稼ぎ者層との間に、小商人層が存在した。この層の多くは冀東地方出身者で占められていた。冀東商人は、同郷人の中からの人材供給と相互扶助を通して勢力を扶植していた。彼らは清末まで東三省の金融を牛耳り、東三省経済の頂点に立っていた山西商人（民国期には官銀号や

官商系糧桟が取って代わる）と、大豆農家・油房・炭坑などに雇用される山東出身の出稼ぎ労働者との中間に位置し、主に後者を相手とした雑貨などの小売買で利益を得ていた。なお山東では、黄県商人が冀東商人と類似の行動様式を取っていた。因みに、東三省と隣接した内モンゴル東部でも山西人（商人・金融業者）―直隷人（商人・労働者）―山東人（労働者）という外省人の三層構造が存在した。[22]

冀東人や黄県人が東三省で商人活動を始めた契機は、地理的に見て両地域が遼東に最も近いこと、棉布や雑糧の流通経路に位置していたことが考えられる。しかしそれはあくまでも一つのきっかけに過ぎない。冀東にも黄県にも有力な商業港や交易都市はない。[23] パイオニアが東三省で足場を築き、同郷人を呼び寄せて地域別商人集団を形成したことにより、初めて冀東商人や黄県商人が誕生したのである。山西商人や徽州商人も、こうした比較的偶然の契機を出発点として中国を代表する巨大商人集団になったのであろう。

冀東人の出稼ぎ形態は、現代中国において内陸部から沿海地方の諸都市へ流入する「民工」とも類似しているように思われる。彼らが就職において頼りにするのは同郷人のコネであり、出稼ぎの目的も永住することではなく、貧しい実家に送金したり、あるいは資金を貯めて故郷で事業を始めるためである。中国商人の社会関係は同郷人相互の連帯から出発するものであると言っても過言ではないだろう。

## 註

(1) 松浦章「清代における山東・盛京間の海上交通について」『東方学』七〇輯、一九八五年、荒武達朗「清代乾隆年間における山東省登州府・東北地方間の人の移動と血縁組織」『史学雑誌』一〇八編二号、一九九九年など。

(2) たとえば篠崎嘉郎『満洲金融及財界の現状』上巻、大阪屋号書店、一九二七年、一一〇頁。また『支那省別全誌』第四巻、山東省、東亜同文会、一九一七年、一〇三九―一〇四〇頁にも「芝罘市場に於ける小銀貨は青島市上に於ける者と大差なく、東三省鋳造の者多く、湖北、江南の者之に次ぐ、是れ年々満洲地方に出稼ぎする山東人が同地方より持ち帰るが故にして」云々と見える。

(3) 楊合義「清代東三省開発の先駆者――流人」『東洋史研究』三二巻三号、一九七三年、同「清代活躍於東北的漢族商人」『食貨月刊』五巻三号、一九七五年。

(4) 佐伯富「清代塞外における山西商人」『東方学会創立二十五周年記念東方学論集』一九七二年、同「清代における山西商人と内蒙古」『藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集』一九七三年。共に佐伯『中国史研究』第三、東洋史研究会、一九七七年所収。

(5) 黄鑑暉『山西票号史（修訂本）』山西経済出版社、二〇〇二年、拙稿「清末民初奉天における大豆交易――期糧と過炉銀――」名古屋大学『東洋史研究報告』三一号、二〇〇七年。

(6) 佐々木正哉「営口商人の研究」『近代中国研究』第一輯、東京大学出版会、一九五八年、二二三頁。

(7) 「満洲の支那商店組織」『満蒙経済事情』一号、一九一六年、一一三頁。

(8) 路遇『清代和民国山東移民東北史略』上海社会科学院出版社、一九八七年、四五頁によると、山東移民の一部は雑貨店を経営し、両替・発券・通信業務も兼営していたとある。但し彼らの営む金融業は相対的に小規模でローカルなものであったと思われる。

(9) 「長春に於ける銭舗」『満蒙経済事情』一四号、一九一七年、二四八―二四九頁。

(10) 錦州でも山東出稼ぎ者の中では黄県人が多く、蓬莱県人がこれに次いでいた。『中国農村慣行調査』第五巻、岩波書店、一九五七年、二五三頁。

(11)『民国十六年の満洲出稼者』南満洲鉄道株式会社庶務部調査課、一九二七年、一五一・一五三頁。

(12)『満洲ニ於ケル棉布及棉糸』（関東都督府民政部庶務課、一九一五年）一五七頁に「奉天ニ於テハ棉糸布ヲ取扱フ店舗ヲ糸房又ハ布舗ト云ヒ、何レモ小売及卸売ヲ兼業トスルモノニシテ」とあるように、糸房とは棉糸・棉布商のことである。

(13) 一九三五年三月、「満洲国」民政部と関東局は外国労働者取締規則を公布し、身元引受人がいない出稼ぎ労働者に対し、入満のための身分証明書を発給しなくなった。松崎雄二郎『北支経済開発論』ダイヤモンド社、一九四〇年、二三四頁。

(14) 同論文は『冀東地区楽亭県［東］桑園農村調査』（南満洲鉄道株式会社天津事務所調査課、一九三六年）という形で邦訳されている。以下、引用部分を掲出する。

茲ニ吾々ノ注意ヲ要スルトコロノ本村ノ富ノ基礎ハ、決シテ農業経営ノ上ニ建設サレタモノテハナクテ、全ク満洲商業繁栄ノ上ニ築カレタモノテアルコトテアル。……本村各戸ノ壮年ハ――甚シキハ二〇才未満、或ハ五〇才以上ノモノモ――多クハ「跑関東」タル満洲出稼商人トナリ、……本村ノ離村者数ハ非常ニ多ク、殆ト全村人口数ノ六分ノ一ニ及ンテ居ル。

……一般村民ハ商ヲ以テ尊シト為シ、依然富商大賈ノ迷夢ヲ追ツテ居ル。……本村ノ土地集中ノ原因ハ其ノ主要ナル原因ハ富商カ収買スルニアル。「跑関東」ノ商人カ一度財ヲ積ム ト例ヘ土地ノ利潤ハ少イトハ言ヘ、土地財産ハ比較的確実テアリ、況ヤ農村ニアリテ威ヲ張ラムニハ土地ノ所有者テナクテハナラナイノテアル。夫レ故ニ本村ノ四大地主モ多クハ商業ヨリ起ツタモノテ比較的土地所有ノ大ナルモノモ総テ同シ道ヲ辿ツタモノテアル。

(15)『天津商会檔案匯編（一九〇三―一九一一）』上巻（天津人民出版社、一九八九年）二六五―二六七頁「楽亭県慶発合等十七家稟陳楽境地当関内外海陸交通要衝商務繁盛請准速立商会文」（宣統二年九月七日）

窃維。楽亭偏居海隅。境内有大清河・老米溝二海口。雖為小口。而口内外捕魚漁船及他境貿販小船。往来不断。因灤河下流由老米溝入海。上流直達口外。故口外与永郡所属灤・盧・遷三州県之土産・雑貨・雑糧。亦由此口出入。且楽境与山東煙台・奉省営口二口岸。雖有渤海一水之隔。而風帆来往甚便。懋遷家。藉此居多。較之商務。似乎繁盛。若設立商会。猶資振興。

(16) 原文は以下の通り。

①譚玉洁。字映冰。父聖培貿易奉天。不知所之。玉洁年二十一歳。沿途乞食往尋。行至伯都訥。詢及土人。得見其父。帰里無資。土人助之。抵家後父殁。玉洁仍就貿易。家可小康。

②李湊泰。字乾堂。……時胞叔録貿易奉天。無子。湊泰遵父命承継。而録已四十一年無耗矣。湊泰矢志往尋。迤邐至吉林城。遇有郭姓自三姓来者。言相距八十里外有臨邑李姓。遂同往。至其地。果有其人。年已七旬矣。

③李文玉。字殿璽。……父赴奉天。十年無耗。玉年十八。以有兄事母。遂乞食尋父。年余。遇於吉省玉石牛泉堡。同山西王姓者。作小経紀。勧帰不肯。且曰。爾暫賈省城。三年後同帰。玉従之。然仍以父年衰久客為慮。後二年往省。至則已逝矣。

④劉永春。字竹林。家貧学賈。父客於外。

⑤馬倫。石門刁部落人。父秉仁。賈於外。

⑥劉永楨。……父進忠。貿易奉天鉄嶺銀局。二十九歳故於外。……十四歳求友。仍在鉄覓舗服賈。為便尋父墓也。舗事暇。即告假。遍訪二十余年。無迹可考。迨道光二十九年冬。復告假一月。携工往尋。

⑦解維純。字慎修。少時父客游奉天。家極窘。……以父久無耗。廃学如奉。跋渉千里尋之。遇於海城之牛莊鎮迎帰。貧無以養。乃服賈於牛。

⑧袁亮。天性孝友。父賈奉天。家貧。亮佣身養母。幾二十載母殁。数年。父由奉帰。

⑨王清相。貿易奉省。父鵬早逝。母得癰症久不癒。及辞賈帰与妻竭力侍奉。

⑩童占一。名士元。其先邑之望族也。至父行健公。家中落寥甚。客吉林。……行健公無耗。占一屢欲往尋。母以其身弱不許。祖父母殁。賈奉天。常意在尋父。道光二十一年。由賈所而東。而母不知也。至吉無父耗。資斧已竭。典衣自給。兼受凍餒。至阿什河。知父在三姓南淘淇捕魚。距家已三千里矣。至其処。父已殁。同事者藁葬之。乃求助土人。徒歩負骸帰葬。既仍服賈。家漸小康。

⑪田潤。字子田。……稍長迫於生計。不得已経商東省。

⑫楊德蘭。字紉秋。……吉林有商号。兄徳芝執其事。因虧倒閉。兄携外欠簿帰。

⑬孫徳懋。字佑賢。錦州銭業巨商也。世居城東二里店子。平生孝親。善能養志。

⑭靳向華。東李荘人。父客死関東。不知処所。華年数歳。聞即

悲傷。及長貿易奉天。逢人詢訪数年。得其藁葬処。表証無疑。負骨以帰。

(17) 原文は以下の通り。

①楊爾瑛。天性淳篤。年五歳。父震成。謀生関外。三十余年。絶音問。爾瑛既長。棄家往尋。潦倒五年。忽於三烏拉南関帝廟遇之。負帰奉養。

②曹紹遠。生時父已先数月出関。歳久無耗。……及道光二十七年。遠年三十五。乃決志尋父。歴東三省。至卜葵省城。聞父在赫津魚皮国僑居。距三姓尚八千余里。其地冰海深数十丈。素与中国不通。遠奔馳冰海上。飢則以鮮魚充飢。逾年四月。抵其国。通姓氏里居。与父見。痛哭失声。奉父以帰。

③楊成年。生週歳。父遠商関外。久無耗。年十五。出関尋父。至江辺新城。父子相認。奉之帰里。

④董蠹。字良臣。監生。性孝友。幼貧。父龍友習商。死於奉天。蠹扶柩帰葬。

(18) 原文は以下の通り。

①劉景陽。字春橋。……嘗於奉天。遇賈人陳某自言。母老待養。遠遊誠非得已。景陽嘉其負販知孝。付之白金五百。俾榷子母。以養親。其人竟席捲以逃。景陽亦終不過問。其尚義軽財類如此。光緒三年正月卒。年六十八。

②孟良貴。字天爵。……道光元年。其父因為弟忤染疫而終。其叔即偪令棄儒而賈。時其祖。商於朝陽。有蓄積。良貴欲至彼奉祖。兼襲祖業。叔不允。令貿易瀋陽。折閲数百緡。叔怒。令其自償。後其祖亡。而朝陽之業亦敗矣。

(19) 管見の限り、順天府では光緒『大城県志』巻九中、人物、孝友に三件、天津府では民国『滄県志』巻八、文献、人物、孝義に二件見られ、また民国『交河県志』・光緒『蠡県志』・民国『南宮県志』・『深州風土記』・光緒『平郷県志』・道光『保安州志』に各一件見られる。

(20) 原文には「卜葵省城」とあるが、卜葵は卜奎のこと、即ち黒龍江省の省都チチハルである。

(21) 民国『交河県志』巻七、人物上、孝友。

(22)『東部内蒙古産業調査』(農商務省、一九一六年)第三班、二五六頁に「而シテ本地区内ノ商賈ト資本主トハ多ク山西、直隷、北京並ニ蒙古ニ接セル満洲人多ク、労働者ハ山東、直隷人多キモノヽ如シ」と見え、また第四班、二五五頁によると、銭舗と票荘の多くは山西人が経営しているとある。

(23) 黄県には龍口という海口があるが、二〇世紀初に至っても人口三八〇〇人の小都市で、内陸部との道路も未整備であった(前出『支那省別全誌』二一四頁)。しかし東北との関係は緊密で、芝罘(煙台)や周村と同様、営口の過炉銀に似た預金通貨制度が発達していた。前註(6)佐々木、二六三頁。

(やまもと　すすむ　北九州市立大学外国語学部准教授)